

ネパール人経営者の憂鬱

● 放
眼
日
中

★

先日、インド紅茶の産地であるダージリンで、150年の歴史を持つとされる茶園を訪問した。4代目という茶園主のラジャ氏は、英国紳士然とし、きりつとした人物で、「有機栽培とは何か」「自然と共生するとは何か」について自ら茶園を案内しながら、筆者にゆつくりと丁寧に教えてくれた。大自然の中、とても癒やされる時間を過ごした。

ちょうど国慶節の時期でもあり、この有機栽培の茶園には何組もの中国人視察団が訪れていた。彼らは「茶農家だ」と言っていたが、ろくに説明も聞かずに工場写真を撮りまくり、足早に去って行ってしまった。この行動には、工場で働く人たちも呆れ顔で、「彼らは何を急いでいるんだ」と首を傾げていた。その中国人が入れないインドがあ

る。ダージリンから車で4時間、1975年にインドに併合されるまでは独立国だったシッキム州である。国境紛争地域であり、当事国として中国は締め出されている。今回初めて訪れて驚いたのは、このネパールとブータンに挟まれた山深い地域が、今や開発ラッシュにさらされていることだった。経済的に遅れたこの地域の発展のためにインド政府および地方政府は、投資する企業に対して法人税の免除や土地、インフラの提供など、さまざまな形でサポートしている。

そのシッキムからの帰り、偶然乗り合いタクシーで一緒になったネパール人と親しくなり、話をしていて「シッキムに工場を移すつもりで視察に来た」と言う。ネパールのカトマンズに繊維工場を持っているが、政情不安で労働者のストライキなどもあり、維持が難しいと言うのだ。ただ、シッキムでは平地が少ない上、土地の確保が難しく、そこに投資ブームが到来したと嘆く。それでも「中国が来ないだけでした」とも話していた。

この経営者は90年前後に原料を日本から輸入していた。そして、90年代前半からは韓国との取引に切り替え、2000年代に入って中国に行く回数が増えたという。中国の携帯電話の番号を示して見せ、中国語も話していた。日本や韓国と異なり、中国は生産コストが安かった上、商品生産のスピードが比べものにならないほど速かったからだと言う。ところが先日、前述の労働者のストにより、ネパールの政府関係から受注した取引で大損を出した。中国で生産の委託先を探したが、コストの急激な上昇で従来の価格では引き受け手がなく、結局、相当の高値で委託せざるを得なくなったようだ。

「中国は何であんなに早く発展してしまったんだ。コストが高くなり過ぎて頼めない。韓国では全ての機械を中国にシフトさせてしまった。バングラデシュはまだまだ怖い」。それで、シッキムに目を付けたのだそう。

今はまだよいが、インドでのコストも上がっている。この先どこへ行けばよいのか分からない、との本音も聞かれた。産業の中でも特にシフトの速い繊維業界。「本当は日本に頼めればなあ」とありがたい言葉を筆者に投げ掛けながら、昔を懐かしむこのネパール人経営者の憂鬱はこれからも続く。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。